

## 就学前教育等の質と子どもの成長について

### 1 就学前教育等の質と子どもの成長を取り巻く現状

- ・平成10年版の厚生白書において、「3歳児神話(子どもは3歳までは、常時家庭において母親の手で育てないと、子どものその後の成長に悪影響を及ぼす)には、少なくとも合理的な根拠は認められない」との記載がなされています。
- ・しかし、我が国では、就学前教育等の質が子どもの成長に与える影響について科学的・実証的・継続的な研究がほとんどなされていないこともあり、教育・保育の質と子どもの成長については、公民を問わず、保護者や職員間で様々な見解の相違が見られる場面があります。
- ・アメリカでは、保健社会福祉省の国立子ども人間発達研究所(NICHD)が、就学前教育等と子どもの成長の関係性について長期間の追跡研究を実施しており、その成果は我が国の就学前教育等のあり方にも多大な影響を与えています。

### 2 NICHDの主な研究成果

#### (1) 研究のあらまし

- ・子どもが受ける就学前教育等の経験の違いが、子どもの社会的、情緒的、知的、言語的、身体的な発達と健康にどのような影響を及ぼすかを調査
- ・各施設の特徴とそこでの子どもの経験に関する詳細な情報収集に加えて、家族と子ども自身の特徴にも注目して情報を収集
- ・情報の収集は1,364家族を対象に子どもの生後1か月から開始され、3歳まで、小学1年生まで、小学6年生まで、中学3年生までの4つの段階において追跡調査を実施
- ・現在、4歳半までの研究成果を公表中

#### (2) 成果のあらまし(0歳から4歳半まで)

- ・母親による就学前教育等でも母親以外によるものでも、子どもの発達にはほぼ差がない
- ・就学前教育等の質が高ければ高いほど、認知や社会性の発達により良い結果を残す
- ・子どもの発達は、子どもが預けられている各施設の特徴よりも、親や家庭の要因により強く影響を受ける
- ・保育者が、子どもの行動に対して感受性豊かである、子どもの興味とやる気を励ます接し方をしている、子どもと頻繁に関わっているといった「ポジティブな養育」が多いほど、就学前教育等の質はより高い
- ・全体として、これらの結果は、就学前教育等と子どもの発達との間における負の関係性に係る懸念について、統計的には意味をなさない(合理的な根拠がない)ものであることを示唆している

【日本子ども学会資料より一部抜粋】